



Title	中世の知と文芸 [全文の要約]
Author(s)	高尾, 祐太
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13839号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78708
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Yuta_Takao_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 高 尾 祐 太

学位論文題名

中世の知と文芸

本論文は、中世の知識人に分野を越えて共有された知的基盤を掘り起こし、そこに光を当てることで、中世の文芸テキストに、従来見過ごされてきた新たな読み・価値・本質を見出すことを試みるものである。近年、近世以降に荒唐無稽のレッテルを貼られた中世の言説に学界の注目が集まっている。しかし、その視線は専ら中世なりの論理の特殊性にばかり注がれてきた。本論文は、そうした現代の我々の目には荒唐無稽に見える、中世なりの論理の背後にあって、それら個々の論理を根底から支える知的基盤を闡明する。それに依って初めて、荒唐無稽とされてきた中世の文芸テキストの再評価が可能となるであろう。

如上の目途に達する為に、本論文は、第一部・第二部・付論の構成を採り、最後に付論に関わる参考資料として、資料の翻刻を付した。

中世の文芸テキストの背後にある知的基盤の闡明を試みる本論文の問題領域は広い。具体的にテキストの読解を通して検討してゆくにあたり、焦点を絞っておく必要がある。

そこで、第一部「古今伝授と中世の知」では、中世の文芸に於いて、最も権威を持ち、中心にあった和歌に対する学問——歌学——、その中でも主流にあった古今伝授を取り上げる。この第一部は、第一章「「三鳥」の秘説と中世の注釈の思想世界」・第二章「古今伝授と中世の神道実践」・第三章「正直の歌学」から成る。

第一章「「三鳥」の秘説と中世の注釈の思想世界」は、古今伝授の秘説として著名な三鳥の切紙と、切紙に附随する口伝（それも切紙として伝わる）の読解を通じて、古今伝授が従来言われてきたように荒唐無稽・牽強附会ではなく、中世の学問の基底にある、中世の知識人が分野を越えて共有した知的基盤に基づいていることを確認する。古今伝

授に於ける『古今和歌集』講釈の講義録（聞書）である『兩度聞書』の仮名序注と、三鳥の秘説に関する口伝「鳥之口伝」に見える「元初の一念」の語は、日本天台で発明された語であるが、天台宗という場を離れて、浄土宗第七祖了譽聖罔『麗氣記私鈔』や一条兼良『日本書紀纂疏』等の神典注釈にも見られる。この語の流通に寄与した知的基盤が、宗密『原人論』等を通じて二次的に享受された『大乘起信論』（以下、『起信論』）的世界観であり、三鳥の秘説が、『起信論』的世界観に於ける人と世界の在り方を、三鳥が詠み込まれた三首の和歌の背後に透視するものであったことを明らかにする。

次に、第二章「古今伝授と中世の神道実践」では、東家流の切紙「稽古方之事」の六通目「中」の「一句之文」の検討を通じて、古今伝授に中世の神道実践の影響が見られること、その実践は現代から見れば荒唐無稽な体験の論理であるが、それも中世の知的文脈に据えて見ることで、その意義を把握できることを確認する。

続く第三章「正直の歌学」では、古今伝授の鍵概念「正直」の内実を考察する。『兩度聞書』冒頭には、『古今和歌集』の題号のうち「古今」二字を「古」と「今」に分解し、それぞれを「正直」の「正」と「直」に配当する言説が存する。そこでは、「正」字を媒介にして、「自性の心」と「天照太神の御心」が接続されている。この、心と神の一体化を志向する言説の基盤に、『起信論』的世界観に依って衆生の心に内在化された、中世神道的な神概念があることを見てゆく。この「正直」は、「自性の心」が「天照太神の御心」と一体であることを了知し——前第二章で検討した「中」の「一句之文」は、儀式を通じてこの一体化を達成するものであった——、それを素直に顕現して詠むこと（「正直」の「直」）を意味する。一方で、古今伝授には、和歌の作為性を排して極端に素直に読もうとする意味でも、「正直」の語が用いられるのであるが、中世の知的基盤としての『起信論』的世界観から見ることで、この一見異なる二つの「正直」が、実は一体の概念であることが明らかになること等を見てゆく。

古今伝授は東常縁から連歌師宗祇へと伝授された二条派の歌学であるが、宗祇に重大な影響を与えたもう一つの歌学として、心敬の連歌論がある。心敬の連歌論は、二条派と対立する冷泉派歌学と一体である。中世の歌壇の主流は二条派にあったが、冷泉派はそれと双璧を為した歌学である。歌学を通じて中世の文芸テキストの背後にある知的基盤を探るに当たっては、冷泉派歌学についても検討する必要がある。そこで第二部「中

世の言語観と文芸」では、心敬の連歌論の名著『ささめごと』と、それに影響を与えた無住『沙石集』を取り上げ、その知的基盤を探究する。

第二部は、第一章「無住に於ける説話の言語」・第二章「心敬『ささめごと』の連歌論」の二章から成る。

第一章「無住に於ける説話の言語」では、無住の説話集著述活動と和歌陀羅尼説（和歌と密教の陀羅尼を等同乃至同一と看做す説）に通底する、無住の言語観を考察する。無住の著作にしばしば引用される空海の言説は、本来の文脈での意味を離れて用いられていた。そこで、空海の密教的言語観と比較することで、無住の言語観の特徴を定位することを目的とした。空海に於いて真言が本有であったのに対して、無住は真理の境界に文字の存在を認めず、真言を真理と接続した方便（金剛幻）として位置付ける。無住に於いて、表面的には狂言綺語に過ぎない説話集と和歌が、深層的には衆生を導く金剛幻として聖化され、肯定されるものと理解される。なお、こうした思考の基盤には、無住が師円爾を通じて得た、宋永明延寿『宗鏡録』があることを、第二部小結にて述べた。

『宗鏡録』もまた、『起信論』的世界観に基づく論書である。次章で検討する心敬の連歌論は、無住のこうした思考——真理（万象の真実の姿）はあらゆる言語を超越しており、言語では捉えられない、という立場——を継受し、それを文芸論へと転換したものである。

続く第二章「心敬『ささめごと』の連歌論」では、『ささめごと』上下巻それぞれの跋文を再検討し、そこに言語で語られたものを脱却する志向から、『ささめごと』それ自体をも「跡なし事」と看做し、言語を越えた境地に至るべきことが説かれていることを確認する。心敬の連歌論は、言語化することで本質を損なってしまう感情を、どのようにして歌・連歌に詠み込むかを追求するものであった。それを可能にする境地を、心敬は「真実の歌道」と呼ぶのであるが、心敬はそれを十識と捉えていたものと理解される。十識は『釈摩訶衍論』に基づく概念であり、『釈摩訶衍論』は『起信論』の注釈書である。

以上、第一部と第二部を通じて、二条派と冷泉派という相容れない異なる立場の歌学が、それぞれに発展してゆく段階で、どちらも『起信論』的世界観を取り込み、それを基に歌学を再構築していたことが確認された。しかし、それは何も和歌の世界に限った

話ではない。既に無住の説話集著述の動機にも見て来たように、より広く、中世の文芸を根底から支える基盤であった。

最後に、付論「『平家物語』「剣巻」の密教的転換」では、『平家物語』の一部の写本に付属して伝えられる「剣巻」の読解を通じて、そこにも『起信論』的世界観が背後に潜んでいることを確認する。

源平合戦の末に、王権の正統性を象徴する三種神器の宝剣が海底に沈んだことは、王権を揺るがす一大事であった。『平家物語』諸本は、宝剣と共に沈んだ安徳天皇の正体を龍神とし、かつて龍神が八岐大蛇の姿であった時に素戔鳴尊に奪われた宝剣を取り戻し、海底の龍宮に帰したのだと解釈することで、この一大事を末世に不可避の出来事として納得することは、よく知られている。しかし、「剣巻」の諸本全てが、安徳天皇の正体を単なる龍神ではなく、「風水龍王」とすることは、従来注目されて来なかった。

「風水龍王」が、我が国の密教の教相で重視された『釈摩訶衍論』の概念であること、「剣巻」を伴って伝来する屋代本『平家物語』の特殊な装丁が、真言宗との関係を想定させること、「剣巻」の宝剣に関する部分と同内容の聖教が真言宗・台密・修験道の場に伝わっていることから、「風水龍王」から導かれる、「剣巻」の密教的読解を試みる。

安徳天皇が宝剣と共に海に没する、という悲劇のモチーフの背後に、衆生の一心(風水龍王)が智慧(宝剣)を獲得して真理の海=果海(海)に到達する、という潜在的な意味が立ち上がること、そして物語の背後に透視される真理の世界から改めて『平家物語』を見れば、諸行無常・盛者必衰の物語が真静な覚りの仮の現れに過ぎないこと、そうした認識に至ることこそが、平家一門の真の救済となることを論じた。

なお、附録「三千院円融蔵『三種神器大事』(一帖) 解題・翻刻」は、付論の参考資料として付した。

以上のような分析を通して、一見荒唐無稽に見える、中世なりの論理が鏤められた文芸テキストには、その背後に通底する知的基盤として『起信論』的世界観があることを明らかにした。こうして浮かび上がった『起信論』的世界観から、改めて中世の文芸テキストを見つめ直してゆく必要性と、その可能性への期待を述べて、筆を擱く。